

IPM実践指標(水稻)

| 管理項目 | 管理ポイント | 点数 | チェック欄(注1) | | | 解説の有無 |
|--------------|--|----|-----------|----------|----------|-------|
| | | | 昨年度の実施状況 | 今年度の実施目標 | 今年度の実施状況 | |
| 水田およびその周辺の管理 | 農薬の効果向上と水質汚濁防止のため、畦畔の整備、畦塗りなどにより、漏水を防止する。【必】 | 1 | | | | |
| | 畦畔・農道・休耕田の除草等を行い、越冬害虫を減らし、次年度の発生密度を低下させる。 | 1 | | | | |
| | オモダカ、クログワイ等の多年生雑草及びツマグロココバイ、ヒメビウンカなどの害虫の発生を抑制するために稲刈り後早期に耕起する。 | 1 | | | | |
| | 土壌診断を行い、必要な場合にはケイ酸質肥料を施用する。 | 1 | | | | |
| 適正な品種の選定 | いもち病等の病害の常発地では抵抗性の強い品種を選定する。奨励品種等の特性表(第1表)を参照すること。 | 1 | | | | |
| 健全種子の選別 | できる限り購入種子を使用する。塩水選により充実した籾を選ぶとともに、病原菌に侵されていない健全な籾を用いる。【必】 | 1 | | | | |
| 健全苗の育成 | 適正な播種量、育苗施肥量等を守る。適正な温度管理を行い健苗育成に努め、病気が発生した苗は早く処分する。 また、苗いもちが発生した場合には、直ちに薬剤を散布する。【必】 | 1 | | | | |
| | 育苗ハウス内及び周辺から、いもち病の感染源になる恐れのある前年の稲わらや籾殻などを除去する。【必】 | 1 | | | | |
| | 細菌性病害の発生を抑制するために催芽・出芽温度を28℃とする。また、出芽時加温をしない無加温平置き出芽でもよい。【必】 | 1 | | | | ○ |
| | 苗立枯病(リゾプス属菌、ピシウム属菌、フザリウム属菌)の発生が問題となる場合は、水を張った枠内で苗を管理するプール育苗を導入する。 | 1 | | | | ○ |
| | ツマグロココバイによる黄萎病、ヒメビウンカによる縞葉枯病の被害が問題となる地域では、苗代周辺の雑草防除(草刈り)を行い、ツマグロココバイ、ヒメビウンカの生息密度を下げる。また、苗代を防虫ネットで被覆し、これらの害虫の侵入を防ぐ。 | 1 | | | | |
| 種子消毒 | 農薬による種子消毒あるいは温湯消毒を実施する。(注2)【必】 | 1 | | | | |
| 育苗箱施薬 | 次の点を考慮して育苗箱施薬が必要と判断された場合には、過剰防除にならないように対象病害虫のみに対して実施する。 害虫でイネミズゾウムシのみが対象となる場合は、天敵保護の観点から長期残効性の剤を使用しない。(注3) ①当該地域での例年の病害虫の発生状況 ②病害虫防除所の病害虫情報(越冬量等) | 1 | | | | |
| 代かき作業 | アメリカセンダングサ、タウコギ、クサネム、イボクサ等の半湿性雑草対策として、除草剤を使用する場合は、耕起・代かきを丁寧に行い、田面を水面から露出させないようにする。 | 1 | | | | |
| 移植作業 | 健全な苗を選定し、適正な栽植密度、本数で移植する。 | 1 | | | | |
| | ツマグロココバイ(黄萎病)やニカメイチュウが問題となる地域は、被害軽減のため移植時期を遅らせる。ただし、イネツトムシが問題となる地域は、被害軽減のために、6月中旬以前に移植する。 | 1 | | | | |
| 雑草対策 | 前年の雑草の発生状況(発生草種、発生量)に応じて、過剰防除にならないように、適応草種や成分数なども考慮し適切な除草剤を選定する。 | 1 | | | | ○ |
| | 機械除草等の除草剤を使用しない雑草管理対策を実施する。(注4) | 1 | | | | |
| | 農薬等の散布後の水が河川等に流出すると、水稻に対して、十分な効果が得られないばかりか環境に悪影響を及ぼしたり、水路を通じて他のほ場に流入したりする危険性があるので、除草剤散布後は十分な効果を得るため止め水管理を行い、環境にも配慮する。 | 1 | | | | |
| | アシカキ等水田畦畔から侵入する雑草対策として、発生初期からの畦畔除草(草刈り)を行う。 | 1 | | | | |
| | 水田内にクサネムや雑草性イネを確認した場合には、種子が着く前に抜き取る。 | 1 | | | | ○ |

| 管理項目 | 管理ポイント | 点数 | チェック欄(注1) | | | 解説の有無 |
|--------------|---|------------------------|-----------|----------|----------|-------|
| | | | 昨年度の実施状況 | 今年度の実施目標 | 今年度の実施状況 | |
| 病害虫発生予察情報の確認 | 病害虫防除所、農業改良普及センター、農協などが発表する病害虫に関する各種情報を入手し、それに基づき防除判断する。情報はファイルするなどして保管する。(注5)【必】 | 1 | | | | |
| 防除の要否の判断 | 病害虫防除は、例年の作業や防除暦だけに頼るのではなく病害虫の発生状況を把握した上で必要に応じて行う。 | 1 | | | | |
| | 要防除水準が明らかになっている下記の害虫については、圃場内での発生密度を確認し、要防除水準に達したら防除を行う。 ①イネミズゾウムシは越冬成虫の移植後の侵入動向に注意し、畦畔際の観察調査(100株程度)で株当たり成虫数が1頭以上の場合に防除する。 ②イネツトムシは8月上旬の圃場全体の観察調査(100株程度)で、株当たり幼虫数が0.3頭以上の場合に防除する。 | 1 | | | | ○ |
| いもち病対策 | 葉いもちの伝染源をなくすために水田内の置き苗は、移植後の補植が終了し、必要がなくなったら早急に除去、処分する。【必】 | 1 | | | | |
| | 地域ごとに定められている基肥量を遵守し、窒素肥料の多施用はしない。追肥については、葉色や予察情報の内容を確認して、地域ごとに定められている量を超えない範囲で施用する(注6)。「コシヒカリ」のいもち病に対する感受性は、葉色カラースケールで判断することができるので、積極的に利用する。(注7) | 1 | | | | ○ |
| | 病害虫防除所のHPで公開されている葉いもちの感染予測結果やクロープナビを利用した葉いもち感染予測情報を入手し、防除要否の判断材料とする。 | 1 | | | | ○ |
| 斑点米カメムシ対策 | カメムシ類の発生量を減らすため、畦畔や水田周辺の定期的な草刈りを行う。ただし、出穂前の草刈りは出穂2週間前までに行う。 | 1 | | | | |
| 土着天敵の確認 | 栽培期間中1~2回は、クモ類、狩りバチ、カマキリ等の当該地域に通常生息している天敵類の発生状況を確認する。 | 1 | | | | |
| 農薬の使用全般 | 農薬を使用する場合には、抵抗性管理のため特定の成分のみを繰り返し使用しない。現在、県内で認められている薬剤耐性菌、薬剤抵抗性害虫、薬剤抵抗性雑草は第2表のとおり。【必】 | 1 | | | | ○ |
| | 止水期間の定められている農薬を使用する場合には、定められている止水期間中、落水・かけ流しは行わないこととし、適切な水深管理及び畦畔管理を行う。【必】 | 1 | | | | |
| 作業日誌 | 各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法、天敵等の発生状況のほかIPMに係る耕種的対策を含めた栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。【必】 | 1 | | | | |
| 研修会等への参加 | 県や農業協同組合などが開催するIPM研修会等に参加する。【必】 | 1 | | | | |
| | | 合計 点数 | | | | |
| | | 対象 IPM 計 (注8) | | | | |
| | | 評価 結果 | | | | |

(注1)チェック欄では、未実施の場合は0、農薬未使用など当該管理ポイントが当該農家にとってチェックの対象外であった場合は「-」と記す。

(注2)通常60℃10分間処理が一般的に行われているが、汚染の可能性のある籾の場合、60℃15分間の処理とする。また、温湯消毒のみに頼らず、適正な温度管理等、耕種的な管理を徹底する。

(注3)イネミズゾウムシのみを対象とした場合の箱施薬剤殺虫剤として、防除基準の中ではガゼット粒剤、オンコル粒剤5、パダン粒剤4がある。

(注4)除草剤を使用しない雑草管理対策としては紙マルチ移植もある。

(注5)発生予察情報を利用したことが後でチェックできるように、当該情報をファイルするなどした場合に点数を付けることができる。

(注6)窒素過多はいもち病の他、倒伏による品質低下、イネツトムシ、ツマグロヨコバイ等の被害増加要因となる。

(注7)コシヒカリでは葉色カラースケール値で3.5~4.0を境に葉色が濃くなると、葉いもちにかかりやすくなる。

(注8)当該年度の病害虫の発生状況などから対象となる管理ポイントの合計点数を記入する。たとえば、農薬を使用しない場合の「農薬の使用全般」や自分で育苗を行わない場合の「健全苗の育成」の管理ポイントの点数は対象にならない。